

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて VI

—『デミアン』と『魔の山』の間—

田 中 博

1) はじめに

”Aber ich glaube doch, daß ihm Hesse der liebste war. Thomas Mann hatte schon den ›Demian‹ mit aufmerkendem Interesse gelesen, natürlich ohne zu wissen, daß sich unter dem Pseudonym ›Sinclair‹ Hermann Hesse verbarg ; hatte sich im Freundeskreis nach diesem unbekanntem Sinclair erkundigt und auch bei S. Fischer angefragt und erfahren, Hesse habe das Manuskript vermittelt, Sinclair sei ein junger, kranker Dichter in der Schweiz, der nicht behelligt zu werden wünschte. Das fand er schade. Er wolle Sinclair nur mitteilen, wie außerordentlich gut ihm der ›Demian‹ gefallen habe. *Anfang der zwanziger Jahre haben wir Hesse in München kennengelernt.* Er besuchte uns mit Ninon Dolbin, seiner späteren Frau. Wir waren sehr gute Freunde. Mein Mann fand ihn persönlich so besonders sympathisch. Hesse hatte eine Art drolligen guten Menschenverstand, sehr viel Sinn für Humor, was mein Mann immer liebte, und er unterhielt sich gern, plauderte gern.”……(1)

「しかし、いずれにしましても、かれがいちばん好きだったのはヘッセだったと、わたしは信じています。トーマス・マンは、『デーミアン』をいちはやく細心な関心をもって読みましたが、〈シンクレア〉というのがヘルマン・ヘッセの仮名であることは、もちろん知るよしもありませんでした。かれは、この未知のシンクレアなる人物について友人仲間にたずねてまわり、S・フィッシャーにも問いあわせましたが、原稿を仲介したのはヘッセで、シンクレアはスイスの若い病弱な詩人で、騒ぎたてられることを望んでいない、という返事しかもらえませんでした。かれは、自分はただシンクレアに、『デーミアン』が非常に気に入ったということだけを伝えたいだけなのに、と言って残念がりました。ヘッセとは、20年代の始めごろにミュンヘンで知り合いになりました。かれは、後にかれの妻となったニノン・ドルピンを伴って、わたしたちを訪ねてきました。わたしたちは、とても中の良い友達でした。わたしの夫は、かれの人柄にとりわけ好感をもっていました。ヘッセは、一風変わった善良な知性の持主で、フモールをととてもよく解しましたが、これこそは、わたしの夫がつねに愛したものでした。それに、ヘッセは、ひとと歓談するのが好きでし

た。おしゃべりが好きでした。……」(2)

このカーチャ・マンの回想録は、1970年頃からはじまって、彼女90才の1973年の夏頃から本格化して、1974年に出版されたものらしい。とすれば、前回から私が悩ませられている彼女の回想である。1920年代の初め頃に、後に三度目で、ヘッセの後半生の良き妻となったニノン・ドルピンを伴って、ミュンヘンにあらわれ友だちとなったとする記述は、もう少しぼんやりとした1920年代と考えても良いのかもしれない。このことに気をとられて、私はすでに三年余がすぎたのに、私の調査能力の不足なのだろう、どうしても具体的な資料が見つからない。ただ、最初の妻マリア・ベルヌウリと離婚する前に、彼、ヘッセは、ニノン・ドルピンと個人的な出会いをしているのは、二つの資料、すなわち一つは、ギゼラ・クライネ著の『ニノンとヘルマン・ヘッセ』にある。1922年の夏、ニノン・ドルピンとヘルマン・ヘッセはモンタニョーラで個人的な最初の出会をしたという記述と二つ目は、ロマン・ロランが1931年8月27日に妻に送った手紙に、「驚いたことに、すでに十年前から——だから、ヘッセの二度目の結婚以前から——モンターニョーラの、ヘッセと同じ建物に彼女はいたのだということを知りました。……」とあることから、ニノン・ドルピンとは1920年代の始めの頃に知り合っていることは、どうもカーチャの回想が、正確ではあるらしいのですが……ミュンヘンで、出合ったのは1925年以外にはどうも考えられないのである。ヘッセは他の資料から、すでに以前からトーマス・マンを作家としてより良く評価していたのに、マンの側からのヘッセへの評価はそれよりも低いのではないかと私には思えてしかたがない。それは『ヘッセ＝マン往復書簡集』の書簡集は、1910年4月1日付のミュンヘンのマンのヘッセ宛の手紙から、1916年8月10日付のバート・テルツから出した葉書までの内容と1926年10月4日付の葉書までそこに手紙類がなく、内容に非常な差があるのであると思われる。その間に、マンとヘッセの間に、特にトーマス・マンの側のヘッセの作家としての評価が変化したと考えざるをえない。それで、今回、私は副題として『デミアン』と『魔の山』の間という題をつけて、その間のことについて私見をのべてみたいと思ったわけである。

2) 『デミアン』について

ヘッセは『デミアン』を1917年ベルンで、ただの数ヶ月で書き上げたが、第一次大戦中の出版事情等によって、結局、一年半以上も後の1919年に出版されたものである。

この『デミアン』については、作者が、作品のまえがきの中で、「この物語をのべるためには、ぼくはずっと前のほうからはじめなければならない。もしできたら、もっとずっと遠くまで、ぼくの幼年時代のそもそものはじめまで、さらにそれをこえて、ぼくの血統の遠い過去までも、さかのぼらねばならぬところだ。……どんな人間の生活も、自分自身へゆく道であり、道のこころみであり、こみちの暗示である。……」(3)と書いている通り、作者シンクレール——ヘルマン・ヘッセ自身の物語とっていいであろう。彼のいくつもの作品に共通する彼の生地南ドイツ・カ

ルプやチュービンゲンに代表される土地を舞台にして、学校物語から始まる。牧師の家に生まれたヘッセ自身の伝記と重なる物語である。悪童クローマーにおどかされて、小さな罪を重ねるシンクレアーを助けたのは、転校生の〈デミアン〉であった。そしてその彼から最初に教えられたのが、聖書、創世紀に出てくるカインとアベルの物語——弟を殺した悪いカイン——の話の裏がえしとしての「カインのしるし」である。正統と異端、表と裏というものがあるということから物語ははじまるのである。「カインと殺人としるしというこの問題は、認識と疑惑と批判への、ぼくのあらゆるこころみの出発点となった。」……(4)ヘッセの実生活でも体験した——アスコナ体験——スイスのテシン州にあるアスコナには20世紀のはじめ頃から、神智論者、アナキスト・オカルト主義者、自然崇拝者、裸体主義者等が集まって共同体を営んだ土地と、ヘッセはつながりがあり、特に1907年から1919年まで、グスト・グレーザーとの接触があったという文献がみとめられる。又1916年頃にはルッセルンで、ユング派の精神分析家に治療を受けた等のことから、キリスト教の異端グノーシス派の異教的考え——アブラクサス——〈神的なものと悪魔的なもの融合〉という考えも第6章を中心に描かれている。この物語の終章である第7章——エヴァ夫人——と第8章——終りのはじめ——では、この作品を書きあげた1917年の第一次大戦の体験については次のようなことが書きとめられている。

……百年以上にわたって、ヨオロッパはただもう研究と、工場の建設ばかりやってきた。かれらは、人間ひとりころすのに、何グラムの火薬がいるかということは、くわしく知っている。しかし、どうやって神にいのるかということは、知らないんだ。……(5)

……労働者が工場主をなぐりころそうと、またはロシアとドイツが、たがいに射ち合いをやろうと、ただ持主が入れかわるだけの話だろうさ。しかしそれも終局は、むだじゃないかもしれない。それでこんにちの理想というもののくだらなさかげんが、立証されるだろうし、石器時代の神々がとりかたづけられることになるだろう。……自然が人間を使ってはたそうとしていることは、個人個人のなかに、きみのなかにもぼくのなかにも、ちゃんと書いてあるんだ。それはイエスのなかにあった。ニイチェのなかにあった。……(6)

結局この『デミアン』が何を言ったかということ、それは、根本的な解決はひとりひとりの自己革新——自己の内部をみつめて——自己自身の中から生まれてこようとするものを生きることによって解決があるとするヘッセの主張がみてとれる。

3) 『デミアン』に対して、トーマス・マンの反応について

彼の残っていた日記にあった事実はすでに報告済みであるので、その後、私を知るようになった資料を次に書き出しておきたいと思う。

新潮社版「トーマス・マン全集 Ⅲ 書簡」 1919年6月6日 ヨーゼフ・ポンテン宛ての手紙及びその(注)：

……最近非常に強い感銘を受けた作品があります。エミール・ジクレールの『デーミアン』。

ある青春の物語』で、最初「ノイエ・ルントシャウ」誌に発表されましたが、いまは単行本にもなってフィッシャーから出ています。私は非常に感動して、すっかり夢中になり、著者の素性、年齢などをぜひ知らせてくれるよう問合せの手紙を出しました。暇がおありでしたら、一読をおすすめします。べつだん「時代の尖端」をゆくものではありませんが、そうざらにある小説ではないと思います。

(注)

約一カ月後の七月八日、マンはポンテンに、「ジंकレールについてはまだほとんど何も攪んでいません。本人が素性を明かそうとしないのです。フィッシャーに問合せたのですが、原稿はヘルマン・ヘッセを通じて入手したものであること、作者はスイスに住んでいる若い病身の詩人だということ以外、何も知ることが出来ませんでした……」と報じている。また1920年6月23日付フィーリップ・ヴィトコップ宛ての手紙には、「私の非常に好きな『デーミアン』がヘッセの作品だというのは本当でしょうか？ヘッセがフロイトの学説にこれほど親しんでいようとは、私にはちょっと意外です。それにしても、なぜこうまで逃げ隠れするのでしょうか。この作品には、ヘッセのいちばんいいところが出ていて、一番の力作ですのに」という言葉が見える。……(7)

またトーマス・マンは、第二次大戦の後の1947年にアメリカ版『デーミアン』の序文に次のようなことが書かれている。「忘れられないのは第一次大戦の直後に不思議なシンクレア某という男の小説『デーミアン』が呼び起こした電撃的な効果のことである。その作品は無気味な正確さで時代の神経に触れ、青年たち全体に自分らの仲間から奥深い人生の告知者が出現したという思いを抱かせ、彼らの心を奪い感謝の念で熱狂させたのである。…」と書いて『デーミアン』に対する当時の彼自身とドイツの若者達に与えた感動について述べている。

以上のことを見て、トーマス・マンが1919年の時代的背景の中で、ヘッセの『デーミアン』にいかにか衝撃的な感動を受けたか。第一次大戦のことを「文明と文化の対立」として『非政治的人間の考察』をドイツの側に立って書いたトーマス・マンにも「これほど優れたやり方で小説というものをあの戦争へと結びつけた人は、これ迄にまだ一人もいませんでした。…」と云わしめ、ヘッセ『デーミアン』への評価を高めたかは立証出来ると云えるのではないだろうか。トーマス・マンの妻カーチャが、『夫トーマス・マンの思い出』の中で語った1920年代のはじめに、ヘッセとドルピンがミュンヘンのマンを訪ねて来て、交際が始まったと語ったことは、おおむねそのあたりのことを伝えていると受け取ることが出来るであろう。

4) 『ドイツ共和国について』マンの転向とその時代のヘッセ

第一次大戦中に書いたマンの『非政治的人間の考察』では、「文明＝デモクラシーに対置するドイツ＝文化」として、ドイツの側について論争の相手にされたフランスの作家ロマン・ロラン、そのロマン・ロランとは1915年からヘッセとの間に交流が始まったという関係をまず前提として書いておきたい。そして、ヘッセとマンの第一次大戦をめぐる、「戦争」に対する考えの時代の推

移と共に、すれちがっていく様子を次に取りあげてみたいと思う。

トーマス・マンの転向宣言とも言える『共和国について』のべる前に、彼が住んでいた、ミュンヘンに於ける第一次大戦後の政治的事件についても少々ふれておく必要があるだろう。1918年11月に、ドイツの実質的な敗北によって第一次大戦が終了してのち、ワイマール共和国が成立したが、それはきわめて危いもろい体制といわざるをえない。1922年6月に外相ラーテナウが右翼青年によって暗殺される。1923年11月にはヒトラー等によるミュンヘン一揆が起る等、右翼からの共和国への反革命がこころみられる。このような政治状況の中で、マンの『共和国について』の講演が、ベルリンのペートヴェンホールで、1922年10月15日におこなわれたのである。

「……私の意図は、これをはっきり申しあげれば、必要なぎり諸君を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれているもののために獲得することです。」(8)

「デモクラシー＝文明」という形で非難してきた彼の、まさに「転向」宣言である。その為にデモクラシー＝人間愛（フマニテート）の留保をつけてはいるが、共和国側に立つことをこの時点で述べている。これは又、1924年に出版された『魔の山』につながる転向であると考察される。

『魔の山』についてのすぐれた論文、山口知三氏の『転身の構図』の次の文の引用をさせていただけでも、理解していただけたらと思う。

「……マンは自分の政治的「転向」を『魔の山』のなかに盛込むにあたって、同時に第一次大戦で死んでいった兵士たちへの鎮魂歌をなんらかの形で書かずにはおれなかったのである。これは、マンの政治的「転向」の内実から言っても当然の要請であった。なぜなら、彼の共和国支持への「転向」は、決して第一次大戦において勇敢に戦ったドイツの自己批判や自己否定の上に成立しているのではなく、先述のように、むしろ「1914年の感激」の延長線上に成立しているものだからである。……それに、なによりもまず、『魔の山』の結末部そのものがマンのこのような「転向」の表現にほかならない。……」

一方、その時代のヘッセはどうであったのか。ハルトムート・ベーメが『ドイツ文学の社会史』の中で、次のように書いている。「自伝的側面から見れば、そこには、ワイマール共和国の発展から次第に離れていったヘッセ自身の歩みと、テッシンへの亡命（1919年）以後、周縁的文化風景の中での一見自立的に見える生活の諸特権とが、反映している。」……(9) 1915年に、ヘッセと出会ったロマン・ロランが、第一次大戦がすでに終わったワイマール共和国時代の1922年の日記の中で、当時のヘッセの姿勢について次のような日記を書いている。

……「1915年に、私たちが戦争のただなかで会い、友だちだと言いつつあんな最初のときのことを、私はわすれていませんよ」と私は言った。——「そう」と彼は答えた。「美しかった。でも、あのときは戦争でした。そして、いまは平和です。」——「私には幻影も幻滅もない」と私は言った、「私にとって、あのときのほうが余計に戦争だったとか、いまのほうがずっと戦争がすくなくとかいうことはありません。戦争は続いています。」ヘッセの顔が曇った、「いや、私は戦争が終わったと信じたいのです。私にはオプチミズムが必要です。私にはうつ病の傾向があるからです。」(こ

れは彼が口にした言葉ではないが、彼の身振りがもっと適切にそれを表現している)。「もう一度俘虜たちのなかに入って務めをはたすことは、私にはできそうにありません。」……(10)

もともと、第一次大戦の始まった1914年や1915年にかけて、ヘルマン・ヘッセが出した、〈せめて、文筆家やジャーナリズムが、声高に戦争に加担するのはやめてほしい〉と出した声明を、ロマン・ロランが聞きおよんで、手をさしのべたのであったから、政治的運動に加わっていくような作家でなかったことは、はじめからはっきりしていたものである。ただ、その当時は、彼のような弱々しい反戦の声ですら、全くめずらしいことであつたのである。ヘッセはヨーロッパの戦争について『デミアン』の中で試みた一つの結論は、「戦争」を克服する道は、各人が、「己が自身の中から生まれてくる」ものを生きるところにしかないとする彼の倫理的な結論にあつて、弱さゆえに「団体」や「組織」の中に逃げ込む人々の団体に「戦争」の解決はないとする彼の主張は、それ以後も変化することはないのである。彼の「内面への道」は発展することはあつても。彼は1919年に出した論文『あるドイツの青年に与うる手紙』の中で、次のように呼びかけているのである。

「……光りはただあなた自身の内心にのみ見出されねばなりません。光りはあなたの内部に在ります。そこに神、あの1914年の愛国的神よりもより崇高く、より不滅な神が実在しています。……神は僕ら自身の内心に在ります。……」 (11)

5) 再び『デミアン』と『魔の山』の最終章の結びについて

『デミアン』ヘルマン・ヘッセと『魔の山』トーマス・マンの二作品は、「第一次世界大戦」に大きな影響を受け、その時代精神によって書かれた作品であることは、すでに述べてきたところのものであるが、その結びを再び取り上げてみると、彼等のその後についての暗示が見えるのではないかと思う。両方の作品とも、最終章の結びは、戦場での主人公、『デミアン』はシンクレール、『魔の山』では、ハンス・カストルプが共に次のように書かれている。

『デミアン』……その星のひとつが、高いひびきを立てながら、まともにぼくをめぐらして、突進してきた。……無数の火花となって、ぱっとくだけちった。ぼくを急に高いところへ引きずりあげておいて、また地面へ投げおろした。……ポプラの近くで、土をかぶったまま、そしてほうぼうきずを負ったまま、ぼくは見いだされた。(12)

『魔の山』……彼は倒れた。いや、彼は腹ばいに伏せたのだ。すさまじい炸裂弾、地獄のぞつとするあの棒砂糖が、悪魔のよううなりを立てて飛んできたからである。彼はつめたい泥のなかに顔を突っこんで、両脚をひらき、両足をねじり、踵を地面につけるようにして、伏せている。野蛮化された科学の産物が、おそろしい中身をつめられて、彼からななめ三十歩ほど前方の地面へ悪魔のようにふかくめりこみ、その地面のなかですさまじい力で炸裂し、土と火と鉄と鉛と、きれぎれになった人間を家よりも高く空中へ噴水のように跳ねあげた。……(13)

シンクレールとハンス・カストルプはほとんど同じような戦場に投げ入れられているのではあ

るが、その結びのありようは、作者の意向のちがいを示しているように私には思える。

『デミアン』の結びは次のようである。……ほうたいは痛かった。すべてそれいらいおこったことは、何もかも痛かった。しかしぼくが、ときおりかぎをみつめて、完全に自分自身のなかへ——暗いかがみのなかで、運命的な映像のまどろんでいるところへ、おりてゆけば、そうすればぼくは、その黒いかがみのうえに身をかがめるだけで、ぼく自身の映像が見られるのである——もうまったくかれに、ぼくの友だち兼みちびき手であるかれに、そっくりそのままの映像が。(14)

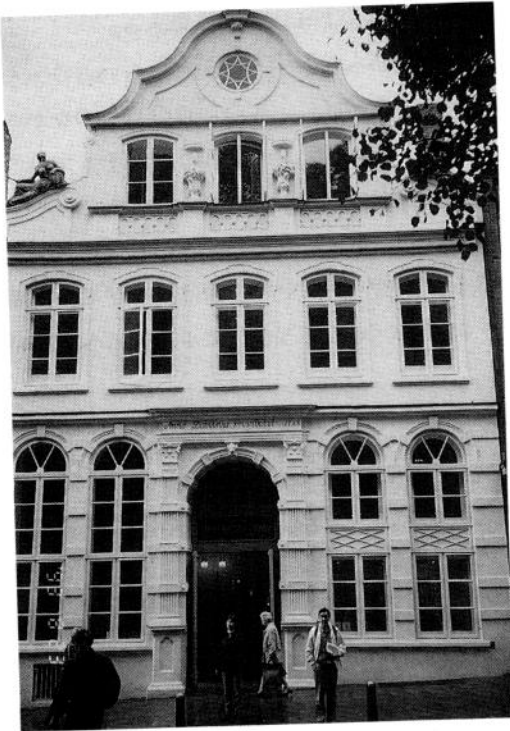
友だち兼みちびき手である彼こそは、デミアンである。作者・ヘッセの結末は、やがて『内面への道』であり、『荒野のおおかみ』のハリー・ハラーの道といえるだろう。ナルシスムへの深い危険な道でもある。

『魔の山』の結びは次のようである。……ごきげんよう——君が活着ているにしても、倒れているにしても！君の行手は暗く、君が巻きこまれた血なまぐさい乱舞はまだ何年もつづくだろうが、私たちは、君が無事に戻ることはおぼつかないのではないかと考えている。正直にいうと、私たちはそれをどちらとも思いわずらってはいない。君の単純さを複雑にしてくれた肉体と精神との冒険で、君は肉体の世界ではほとんど経験できないことを、精神の世界で経験することができた。君は、「陣とり」によって、死と肉体の放縦とのなかから、愛の夢がほのぼのと誕生する瞬間を経験した。世界の死の乱舞のなかからも、まわりの雨まじりの夕空をこがしている陰惨なヒステリックな焰のなかからも、いつか愛が誕生するだろうか？……(15)

作者マンは、ハンス・カストルプの彼方に、人間愛と愛の道を予感していると考えられよう。

注

- (1) Katia Mann Meine ungeschriebenen Memoiren S.44~S.45 S. Fischer Verlag
- (2) カーチャ・マン著 山口知三訳 『夫 トーマス・マンの思い出』 S.56 筑摩書房
- (3) ヘルマン・ヘッセ作 実吉捷郎訳 『デミアン』 S.7~S.8 岩波文庫
- (4) 同上 S.45.
- (5) 同上 S.183.
- (6) 同上 S.184-185.
- (7) トーマス・マン著 浜川祥枝訳 『トーマス・マン全集Ⅶ』 S.181 新潮社
- (8) トーマス・マン著 佐藤晃一訳 『トーマス・マン全集Ⅹ』 S.495 新潮社
- (9) ヤン・ベルク他著 山本尤他訳 『ドイツ文学の社会史 上』 S.542 法政大学出版局
- (10) ロマン・ロラン著 清水 茂訳 『ロマン・ロラン全集 39 書簡Ⅶ』 S.213 みすず書房
- (11) ヘルマン・ヘッセ著 芳賀 壇訳 『戦争と平和・ヘッセ著作集』 S.102 人文書院
- (12) ヘルマン・ヘッセ作 実吉捷郎訳 『デミアン』 S.222 岩波文庫
- (13) トーマス・マン作 関泰祐・望月市恵訳 『魔の山 下』 S.648 岩波文庫
- (14) ヘルマン・ヘッセ作 実吉捷郎訳 『デミアン』 S.222 岩波文庫
- (15) トーマス・マン作 関泰祐・望月市恵訳 『魔の山 下』 S.649 岩波文庫



ハインリッヒとトーマス・マン記念館
＜リュースベック市・ドイツ＞



魔の山の舞台となった、ベルクホフは現在、ホテル
ベルビューになって残っている。
＜ダボス・スイス＞